絵画による心理治療

広　田　　実

人間の一生の中で，３才から７才の年頃は最も絵を描く時期である。画家やデザイナーなど絵を専門にする者は別であるけれど，殆んどの者は11才以後は自ら絵を描くことは稀れになる。それゆえ幼児で絵をかかない児や，毎日きまりきった絵をかく児は，年少児童の中では異常な状態といえるだろう。その児童の行動にも，問題となる他の徴候が見出されるからである。

この描画不適応の原因を探り，適切な処置を施せば，今までかかなかった児が描くようになり，きまりきった絵を描く児が変容のある絵をかくようになるであろう。それと共に他の問題行動も変化し，適応する状態に至るであろう。では行動障害の原因を発見し，その改善をはかる処置はいかなる手続があるであろうか。多くの心理療法の中で，絵画療法は，結果として残った絵が保存できるので，治療と診断の２つの役割をもっているという特色がある。即ち，自由に描かれた絵は，投影法として人格を表わすだけでなく，心理療法の役割をもっている。さらに健全な正常人にも影響し，その創造性を開発し，自主的な人間形成の働きをもつ点では広義の治療教育といえよう。

絵画療法の多くは，絵が感情的葛藤の下剤の役割をするとの構想にもとづいている。治療対象の多くは年少児童で，絵や糊絵（*Finger-painting*）を自由に描かしたものである。成人では長期入院患者や快復期にある患者，精神病院，社会福祉施設の収容者にリクレーション療法（*recreation therapy*）としておこなわれている。

遊戯療法との関係　色々な遊具を自由に選択できる遊戯療法は，遊戯そのものに治療効果を期待するより，遊戯は治療者と来談者との関係を作る手段である。絵画療法では描画が主要なものとなり，対人関係による理解よりも，個人経験の表現が主となるので治療理論もやや異ってくる。

精神分析の浄化法　メラニー・クライン（*M. Klein* 1927）は遊戯分析（*Play analysis*）を考案した。それはアンナ・フロイド（*A. Freud*）と違って，児童の超自我は既に発達していると考える。自由で，自発的な描画行動の分析的解釈は，成人の自由連想と同じやり方で行う。この方法がかえって，早く意識の深層に立入ることができる。かくされた観念，感

情，願望を象徴的に表現し，意識化することを自分に許すことは，閉じこめられた精神葛藤から来談者を解放する，と考えた。しかしこの浄化法はただ一時的な効果に終ることがある。

方　　法

幼児の行動障害を治療するために，絵画療法と他の心理療法との併用を，今回は試みた。この方法は人格全体にわたる諸資料から，行動障害の原因を推定し，治療の仮設を設けて，絵画を含めた処置を行い，その結果に従って検討する。同様に第2，第3次と仮設を立て，結果によつて仮設を修正する。仮設，検討の過程を繰返し，追求する。

今までは絵画は固定した，行動の所産であるために，その所産だけから人格全体を推しはかるような誤りを犯して来た。描画自身は行動全体からみれば1つの特定の行動にすぎないからである。これに対して今，行動障害の原因を探り，それに応じて治療（絵画療法と他の心理療法の併用）を施した時，治療期間中の描画行動の変化でもつて，人格の変化を診断できるのではないかと考えられる。併用した他の心理療法の結果も人格変化の診断に役立つことは勿論である。

治療面でも，絵画療法だけを切り離して用いたのでは，適用対象の範囲も狭く，その効果も少くなる。来談者は有機的全体として理解されるべきで，治療者と来談者との受容的関係の成立が前提となる。もしそうでなければ，絵画療法は形式的な心理療法になり，効果的でなくなる。

広田1959[1]は治療効果の目安を，幼児の絵では，描画面積が広く，描画時間が長く，使用色の数が多いことを指標とした。この理由は，幼児はうまく描けないのでかえつて思いきり描く。これを V. Lowenfeld 1939 [2]は触運動的な知覚（*haptic perception*）と名づけた。うつ積したエネルギーを放出する，即ち，のびのびと思いきりかくことが治療的働きをもち，絵を創造的にもならしめる要因である。

a）　材料：サクラ粉絵の具12色，パステラ粉絵の具12色。細・太筆，絵の具皿，画用紙，更紙（いずれも4つ切）。糊，時計，記録用紙，鉛筆。

b）　手続き：1）幼稚園での問題行動，2）行動観察，3）家庭状況および生育歴の調査，4）心理検査，要求水準と興味の調査，5）描画中の行動，6）処置，即ち治療。

5までの調査とテストの結果によつて，絵をかかない原因，あるいはきまりきった絵をか

く原因を推定する。その推定に基づいて第1次方針をたて，処置を施し，その結果によって効果を検討する。さらに第2次方針をたて，処置を行い，その結果によって効果を吟味する。以下同様に，第3次，第4次と治療効果のあがるまで続ける。

K 児 の 事 例

I　児童の概観

生活年令5才8ヵ月，男，R幼稚園児。昭和29年10月26日～12月24日に調査。

1．問題行動

a）入園後，クレヨンで絵をかいていたけれど，夏休み後の9月4日から描かなくなった。

b）登園後は自席に坐っていることが多く，他児とは遊ばずに傍観している。

c）遊びを傍観しながら指をなめる。小指が多く，他の指もなめる。

d）他児が話しかけても，顔を見るだけで黙っている。

e）発音が不完全。タ行，ラ行，特にサ行。「どうしたの」と聞くと，暫くたってから小声で「ちらん」（知らん）とか，数の6を「むっちゅ」という。

f）他児に，「Kさん色紙とりかえはった」と云われると，両手で顔を覆い，ヒーヒー高い声でいつまでも泣く。

2．幼稚園での行動観察

a）挨拶しない。女友達か先生以外は誰とも話をしない。作品を見せる時も黙ってつき出す。

b）粘度遊びをする時は，右手で粘土を力一杯板にパンパンと打ちつける。他児に「やかましい」と云われるとやめるけれど，暫くたつとまた打ち始める。

c）動作がおそい。色紙を折ったり，鋏で切ることには長時間費し，作品を念入りに仕上げる。

d）他児の遊びを傍観するけれど，コマまわしの時は一寸離れた所でまねをする。

e）黒板に消え残った他児の白墨絵を指先でなぞて形どる。

f）弁当はご飯を先に，好きな卵を後で食べる。隅に残ったご飯は箸を使わずに右手で食べる。

3．生育歴と家庭状況

父48才，母39才の時出生。姉3人，末っ子の男児が本児。3女の姉との年令差は6年。隣家に伯母。

a）出生時乳を吸わないで困った。

b）K児の３才以後，母は商用で留守がち。乳児の時から伯母宅で大半を過す。伯母宅でご飯を食べ，寝ることもある。

c）服を着るのに時間がかかるので母親が着せる。服を着させてもらうまで床の中で，メンコを作って数えたり，絵本を見て母親の来るのを待つ。

d）３女の姉と「本を見せよ」「見せない」でよく喧嘩する。

e）母親は「K児は幼稚園ではかわいそうなほどおとなしいけれど，家ではわがままで，やんちやなんです」という。

f）姉３人とも内向的。姉達は筆答試験ではいい点をとるけれど，発表はあまりしない。

4．心理テスト

a）知能テスト。K式乳幼児発達検査では精神年令５才６ヵ月，ＩＱは96である。課題によってはできたり，できなかったりして非常にむらがある。

b）要求水準のテスト。抹消テストで，いくつ消せるか予想を立てさせ，次の実際の結果からまた予想を立てさせ，このようなことを繰返してゆくテストである。

表１　要求水準テスト結果

試　行	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
予　想	21	13	12	14	13	16	21	17	12	10	20
結　果	13	10	14	14	14	19	18	19	17	17	17

－ｒ（予想・結果）　＝＋0.02

…ｒ（結果・次の予想）＝＋0.50

≍ｒ（予想・次の予想）＝－0.01

予想と結果，予想と次の予想には関係がないけれど，結果が次の予想に非常に影響するところから，この児は生活面で，ある枠組にひきづられていることがわかる。

5．興味と遊び

a）鋏や粘土を使う構成的な仕事に熱中する。

b）幼稚園の室内ではコマ，まり投げ，絵本に興味をもつ。室外では砂遊び。

c）自宅内ではきまった男児とコマ，ペッタンをする。戸外では女友達と一緒に公園でブランコ，すべり台で遊ぶ。子供の野球を傍観する。

6．絵について

a）クレヨン画。(1)入園後始めてクレヨン画をした時，画紙は１枚だけ使うようにと云ったのに，またたく間に４枚使う。２度目，３度目も同様。飛行機，不明なもの，人物，旗を

描く。(2)黄，黒，橙，茶色の中，いずれか1色でかく。6月から黄，赤，黒，水色の中，2色を組合わせて使う。全体を通じ黄色がよく使われた。

b）水彩画。(1)6月29日から9月3日までに5回かかせた内，3回かいた。黄色の線で自動車をかく。(2)9月4日から9月9日まで展覧会出品作品を作るのに，園児達に連日かきたいだけかかす。今まで使用した更紙に代って画紙を与える。K児に「かいてごらん」と云って紙を渡すが受取らない。もう一度云うと高い声でヒーヒー泣き，どうしてもかかない。(3)その頃家庭では晩になると鉛筆でわけのわからないものをかいている。「かいてごらん」と云えば，嫌がるけれどかく。爆弾，ロケット，電燈をかく。

7．習　　癖

偏食：好きなもの，骨の少ない魚（ブリ，サバ），卵，大根，里芋，馬鈴薯。嫌いなもの，葱，ほうれん草，人参，小魚（じやこ）。間食は甘納豆，1日20円分位たべる。指なめは遊びを傍観している時。鼻がよくきく，外から帰宅した時，「ものすごくいいにおいしてるわ。何おかずや」とまっさきに聞く。こわがり：蜘蛛，便所，夜間外出，雷。

8．身体的特徴

虫歯2本。時々下痢，脱腸。

9．性格の推定

末子。男では1人子。両親の晩年の子。起床，着衣は親に依存する，使いは嫌がる。偏食，間食が多い，女友達のつれがないと，幼稚園行きはごてる。以上から甘やかされていると考えられる。

その結果，タ行，ラ行，サ行の発音ができない。指をなめる。動作がのろい。交友なし。家ではわがままだが，幼稚園では傍観的態度。以上から過保護（*over protect*）の児童と推定される。

10．描画しない原因の推定

a）「内弁慶の外すぼり」で，幼稚園で傍観的になるのは，家庭における雰囲気と幼稚園における雰囲気とが異っており，そのため幼稚園が不安の場であるからと考えられる。

b）家庭では余り描いていない。それ以上に幼稚園でかかないのは，絵をかく動機はあるのに不安であるためにかかないのであろう。

Ⅱ　心理治療

1．第１次方針

幼稚園における不安を除くために，

a）自由遊びの時，担任の先生が個人的に親しくする。

b）グループの中で女友達と並んで絵をかかす。

c）グループの中で印象的な絵を見せてかかす。

d）グループの中で個人的な事件を思い出させてかかす。

2．第１次の処置

第１次方針のａの場合は，(1)弁当の時。K児の周囲におしやべりの児を置き，「今日のお菜は何でしよう」などと話しながら食事をさせる。(2)砂場では他児と一緒に，「トンネルを作りましょう」と云いながら彼にバケツを渡す。砂を運んでくると，「まあ沢山ね」と云ってやる。(3)何して遊びたいかを問い，他児の乗っていたブランコに乗せる。「上手ね」と云うと強くこぐ。(4)女友達と３人だけでトンネルを作る。「お砂運んで大きなの作ろう」と云って熱中する。「つぶれた」と大声で叫ぶ。興にのった時よごれたままの手に，「かいてごらん」と云って画紙を渡す。他児のいない２人だけの部屋で，彼はためらいなく，次々色をとりかえて描いてゆく。かき終ると，黙って手を洗いに行く。女友達に向って「絵をかいてん」と報告する。

第１次方針のｂ，ｃの場合他児と同じ取扱いで画紙をもらうとすぐかいた。

d）の場合。前日，彼が始めて縄とびしたことを思い出させ，「昨日の縄とび面白かったの」と話しかけ，「そのことを描いてごらん」と云うとすぐかく。終ってからも黒板にチョークで絵をかくので，さらに紙を与えると飛行機をかいた。

3．第１次結果

K児の行動観察のため注意したり，処置をとっている間に，徐々に彼の行動に変化が起り，(1)自由遊びの時，時々先生の方を見る。(2)唱歌や遊戯を指名されると１人でする。(3)云われると友達と一緒に掃除当番や絵の具の皿洗いをする，などの態度が現われた。

絵をかかなくなってから後，最初に絵をかいたのは，彼が始めて幻燈（カチカチ山，一寸法師）を見た直後，女友達と一緒に並んでかいた，黒と濃紺の２色でかいた幻燈画である。以後，ａの処置をするまでに一斉保育の際にもう１回かいた。処置以後はいつでも描くようになった。

表2　処置の効果

処　置*	描画** 面積	描　画 時　間	色　数
	%	分	色
a	60	43	10
b	50	10	6
c	33	4	1
d	17	5	2
平　均	40	16	5

* 各処置は各々1試行
** 紙面全体を100%とする。

(1)　左の表のように，個人的に親しくした後でかかせた場合は，描画面積，描画時間，色数が最も多く，次にグループの中で3人並んで，グループの中で個人的な事件を思い出して描かせた場合である。グループの中で印象的な絵を見せてかかした方が，dの場合より描画面積のみが16%多い。

(2)　個人的に親しくした後で描かした場合は，他の場合より描画時間が30分以上も長く，描画面積，色数も他の3方法の平均より多く，面積では27%，色数では7色多い。

(3)　なにをかいてもよい自由画a，bの場合の平均の方が，描くものが示される教示画c，dの場合の平均より，描画面積で30%，描画時間で22分，色数で7色多い。

4．第2次処置とその結果

個人的に親しくしたことにより不安が少しでも除かれ，場の緊張が減少し，絵をかきだした。aの処置が最も有効であったから，一層の親密な関係を作るため，他の園児が帰った後，女友達と一緒にブランコ，ジャングルジムで一緒に遊び，シーソーに乗る。昼食をたべながら，家族のこと，正月の話などをする。絵の具の準備を手伝わせる。

結果：(1)　一斉保育の際にみられない自発的行動が現われ，おしやべりとなり，ジャージャー，ブーブーと云いながら描く。かくのを待たすと大声で「早うかくねん」としつこく催促する。

(2)　かく絵は一斉保育の時と異なっており，ストロークが強くなって，画風としては激しいものが漸次表現される。雨，爆弾，火事をかく。

(3)　なお第1次処置のb，c，dの結果も加算して，その平均は次表のようになった。

表3　処置の効果

処　置	描　画 面　積	描　画 時　間	色　数
	%		
自由画a)，b)	52	17	8
教示画c)，d)	30	8	3
平　　均	41	13	6

自由画は描画時間，色数において教示画より2倍以上，描画面積において1.7倍の効果が認められる。K児が描き始めてから自由画題10回は10回ともかき，教示画題13回の内，2回はかかなかつた。それは牛を描きましようとの言語的画題と，花瓶と台の実物を見てかく写生の場合であつた。

以上の結果からK児に実施された処置は効果あったものと考えられる。

Ⅲ　一般的行動の適応

心理臨床施設（京都市児童院）と幼稚園でなされたテストや処置が，K児や母親に影響を及ぼし，問題行動が急激に減少した。幼稚園では，

1)　「絵をかきたい人は？」と云えば元気よく手を挙げ，進んでかくようになる。絵筆をとりにゆく時も，自信に満ちた態度で歩き，時には両足を揃えてとびながら行く。できあがると「かいた」と云って見せる。

2)　縄とび，シーソー，ブランコなど動的な遊具で遊ぶ。

3)　砂場でトンネルを作っていると，他児が仲間入りしてくる。協同して遊ぶ。

4)　今まで挨拶をしなかったのに，するようになった。

5)　指名せずに「窓を開けてちょうだい」と云うと，本児が走って行き，開ける。

6)　面白いことがあると，飛んだり，走ったり，笑ったりする。少人数の時はさらに自発的になり，遊びの邪まする児を「どいて」と云ってのける。

7)　「Kさん，絵上手やね」と云い，他の児らは彼を特別な見方をしなくなる。

家庭では：1) 知能テスト以来，文字，数字に興味をもち，進んでかき出す。

2) 嫌いな野菜を嫌がるけれど食べる。

3) 甘いお菓子は余りたべなくなる。おこづかいが減った。

4) ペッタンで遊ぶ代りに，本を読むことが多くなる。

5) ボール紙で飛行機，カルタを作り，母に見せる。

Ⅳ　事例研究による考察

K児の場合，先生が彼に対して特に関心を寄せている，そのこと自身が既に大きな動機づけとなつた。さらに調査質料によつて治療的仮設をたて，第1，第2次の方針と処置を試みた。効果が認められて初めの目的を達成できたことから，われわれの問題行動の原因の推定が適切であったことを確認した。

その結果，幼稚園の雰囲気になじめない不安が，絵をかくことを拒否せしめたけれど，漸次不安が少くなるにつれて，描画するようになった。ここで，不安――描画拒否の関係を把握できた。

A 児 の 事 例

I　児童の概観

生活年令5才10ヵ月。女児，R幼稚園児。昭和29年10月26日から12月24日まで調査。

1．問題行動

a）入園当初から，いつもきまりきった絵（家）をかく。b）交友少く前述のK児と，隣家C児（女）との他は余り遊ばない。c）友達が幼稚園を休むと，登園するのを嫌がる。d）絵をかく時はC児と並び，模倣する。

2．幼稚園での行動観察

a）クレヨンや鉛筆で絵をかく時，首を曲げ，紙に顔を近づけ，小声でつぶやきながらかく。時々手を止めて他児を見る。他児が側へ来ると絵を両腕で囲い，顔で覆う。

b）粘土は最初「しとないねん」と云ってしなかった。

c）色紙を折り，切ることは云われた通りにする。途中「こんでええの？」と度々聞く。「上手ね」と云うと笑顔になる。

e）紙片を貼ったり，構成するような面では創造性に乏しく，作品には空白な部分が多い。

f）1人の時は他児の遊びを傍観する。乱暴な児が近づくと，何も云わずに逃げる。C児と一緒の時は先生の傍まで来て，「悪いことしはるねん」とC児に訴えさす。A児はC児の後方で肩をゆさぶりながら見ている。

g）唱歌，遊戯をする時は，顔を真赤にし，熱心にする。愉快な時は声を出して笑う。

h）走り競争，鬼ごっこはしない。椅子とり遊びは真先に没になる。

i）食事前，先生に「手きれい？」と云って見せにくる。他児が鼻汁を出すと弁当をかかえて逃げる。

3．家庭状況

父，母健在。小学4年の兄。祖母。兄はA児をうるさがり彼女と遊ばない。祖母は昭和29年7月から同居。A児は祖母のあげあしをとる。母に対して「兄ちゃんばっかりひいきする。私ばっかりおこる」と云う。母親は「女の子も大事だが，やはり男の子の方が大事だからね」と云う。母親には古い家族制度の観念が残っている。

4．心理テスト

a）知能テスト。K式乳幼児発達テストでは，精神年令6才3ヵ月。IQは104で普通児で

ある。色の名の知識が乏しく，４つの内３つしか云えなかった。テスト中少しかたくなっていた。

b）要求水準テスト。予想・結果のr＝＋0.42，結果・次の予想r＝＋0.02，予想・次の予想＝－0.86（１％の危険率でrの母数ρは０ではない）。予想と結果には関係があるけれども，予想が非常に動揺し，無謀な予想がみられる。この点からA児の情緒には不安定な所がみられる。

5．興味と遊び

a）鋏を使ったり，折り紙に熱心である。

b）唱歌，遊戯を好む。

c）幼稚園の室内での遊びはC児と一緒に黒板に人形をかく。外ではブランコ，砂遊び，縄とびである。

d）家庭内では人形ごっこ。母の側で折り紙をしている。描画はぬり絵が多い。時に蠟石で道に人形をかく。外ではケンパして遊ぶ。

6．絵について

a）クレヨン画。４月15日から７月８日までに描画した８枚の内，６枚まで家をかく。黒，赤，紫色の何れか１色で輪廓をかき，中をぬる時もこの４色の内の１色を使う。

b）水彩画。６月29日から11月26日までにかいた16枚のうち，13枚家をかく。一定の筆順で画面中央に大きく，一色で輪廓をとる。13枚の内９枚は屋根に色をぬり，室内は空白である。

c）描画中は口を少し開けている。舌が見える。熱中すると口辺にたまった唾液が画面上におちる。

d）絵の具を筆に含ませると，皿の縁の左右に手早くこすりつけ，筆先の乱れたままで床にかがみ，左手は膝におき，腰を床から離してかく。

e）C児の絵を見て，道，木，縁どりをまねしてかく。

f）描画時間は５，６分。かき終ると「かけた」と云って見せにくる。

g）順番にかかしている場合，長時間待っていても催促しない。

8．習癖について

間食が多い。朝床の中で，昼食後，夕食前，夜床の中で，それぞれせんべいや飴を食べ

る。寝起きが悪い。菓子もらって，２度位起きなさいと云われて起きない時は，抱きおこされる。食べ方が遅い。兄とけんかする。おこると兄を打ち，頭をひっかく。母がとめると「兄ちゃんのひいきをする」と云って，またおこる。興奮すると前後の見境いがなくなる。こわがり：便所，夜間のお使い，どんな虫でも，雷をこわがる。

8．身体的特徴

扁桃腺肥大。虫歯（前歯殆んどない）。左足骨折。腰骨脱臼，ギブス使って全快。

9．性格の推定

末子。間食が多い。寝起きが悪い。母の傍で折り紙をする。服を着せてもらう。靴を揃えてもらう。兄に布団をひいてもらう。食べ方がおそい。以上でもって依存的な児と考えられる。その結果，身体にも影響して虫歯，扁桃腺肥大になって，身体の抵抗が弱まっていると考えられる。

10．きまりきった絵をかく原因の推定

a）描画は友達の絵を見てまねをする。

b）ぬり絵をよくかく。

c）友を通じて用事を果す。これからA児は依存的であり，自ら工夫すること少く，描画の手段が乏しく，絵をかく興味が少い。

Ⅱ　心理治療

1．第１次方針

a）C児と２人だけの時話をしてやり，描画意欲を高めて後かかす。

b）一斉保育の場で画題を与えてかかす。

c）一斉保育の場で他児と離れた所で，最近の事件を思い出させてかかす。

d）糊絵をした後でかかす。

2．第１次処置

aの場合は，自由遊びの時，A児とC児に向つて，「昨日ブランコ上手にしてたね。面白かったの」と話しかける。笑顔となる。「ブランコしてるとこ絵にかいて見せてちょうだい」と云うと，早速かき出す。大小２つのブランコをかく。画紙からはみ出たが続けてかき，後でかきなおす。一度だけC児のを見て，人物をかく。

bの場合は，他児と同一条件でかく（ただし他児から離して）。教示画10回かいたけれ

ど，教示題に要求された内容をもった絵はない。cの場合は，一斉保育の場で他児と同じに取扱う。前日昼食時に他児が風船を破裂させたのを思い出さす。最初は興味があって少しかいたけれど，すぐなくなり以前の様な家をかく。

dの場合の材料：メリケン粉。サクラ絵の具。パステラ粉絵の具。皿。太・細筆。四つ切画用紙。橙と緑の2種類の糊絵を作り選択さす。橙色の方を使用。非常に興味をもち，最初右掌で左右なぜて一面にうすくのばす。5分後左手も使う。7分後，日光，家，女の児，男の児，花，自動車をかく。15分たって椅子にかける。右手で左手の甲をよごして遊ぶ。30分後，「面白かったの」と聞くと，「面白かった」と云う。「今度は絵の具でかいて遊んでごらん」と云って画紙を渡すと，すぐかき始める。太陽，家，女の児をかき，その洋服に色をぬっていると漸次興味を増し，僅かの余白を探して，画面をぬりつぶす。

結果：(1) aの描画は積極的で，描画中一度だけC児のを見る。bの場合，翌日靴屋と小人の童話をして，描かした教示画ではブランコの絵をかく。

表4 処置の効果

処置	描画面積	描画時間	色数
	%	分	色
a	25	8	3
b	23	11	5
c	3	5	3
d	97	25	11
平均	37	12	6

(2) cの場合は効果が少い。

(3) dの場合は非常に関心を示し，熱心にした。他の場合の平均より，描画面積，時間，色数において3倍以上である。

3. 第2次処置

ブランコ遊びと糊絵に特に興味を持っていることがわかったので，この面から興味を高めながらその後に描画させる方法をとった。彼女とその友達をブランコに乗せたり，糊絵で遊ばせた後にかかした。

結果：(1) 描画に自信と興味をもち，多くの色を使って，長時間かくようになつた。

(2) 家の絵にかわってブランコ，虹，ぬりつぶした4角な空，窓，壁をかく。

(3) 一斉保育の場で教示画を3回したけれど，全部基準以上のできであった。

4. 第3次処置

さらに糊絵の効果が認められるのでこれを続けた。

(1) 第5表のように糊絵をしてから以後ペインテイングの自由画，教示画にも影響し，糊絵を課する以前の絵より，描画面積で約3倍，時間で約1.5倍，色数で1.6倍に増大した。

表5　各種の処置の効果

処　　置	描画面積	描画時間	色数
	%	分	色
処置をしない時（5回平均）	20	7	4
教示画の場合（12回平均）	25	11	5
糊絵した直後（4回平均）	80	18	11
平　　均	42	12	7
糊絵を始めてから（10回平均）	80	16	8

(2)　第1次方針a，cを単独に処置した場合は効果は少ない。糊絵直後にaを用いた時は，糊絵前より描画面積で約3倍，時間で約1.6倍，色数で約2倍の著しい効果がみられた。

(3)　教示画を始めてから糊絵するまでの期間では，教示画の場合は何も処置しない時より，描画時間で約1.5倍，面積，色数において僅かに多い。

(4)　糊絵を始めてから10回描画した中に，家を2回かいた。

Ⅲ　一般的行動の適応

A児の場合の一般的行動に及ぼした効果は前述のK児の場合ほど著しくはないけれど，

1）「糊絵をした日から絵好きになってん」と云い，絵の具の準備を進んでする。

2）「Cちやん，云わはるから真似しとなるねん」と云って，模倣することに対して批判的になる。

家庭では，3）朝床の中で母が菓子を与えなくても起きるようになった。

4）風邪をひいて「幼稚園休みなさい」と云っても，無理に登園したがる。

5）母にかくれて1人で服を着たがり，ほめると喜ぶ。

Ⅳ　事例研究による考察

第1次，第2次，第3次の方針と処置，その結果より，われわれの推定が適切であることがわかった。即ち，依存児は根気が少く，工夫したり新しい手段を取ることが少い。この新しき方法を保育者が与えることにより，未知なものに興味を起させることにより，さらに経験を広めることができる。きまりきった絵をかくのは，それ以外に描く手懸りをもっていないからである。これを変えるためには新しい材料を用うればよい。例えばクレヨンから水彩へ，水彩から糊絵へとのようにである。A児の場合，糊絵でも同じことばかり繰返すとやがて興味を失い，きまりきった絵にもどるのでないだろうか。A児の関心，欲求を探り，新しい刺戟を与えている内に，自発的活動になるのではないだろうか。

描画における問題の原因を色々の手続きによって調査し，その原因を推定し，それによって方針を立て，処置をなして効果があったとすれば，われわれの立てた仮設は適切なもので

あったと考えられる。

幼児の問題行動の治療は，その原因，処置，結果の過程を検討し，さらに第2次処置，その結果によってフイドバック（*feed-back*）しながら追求する過程である。

V 要　　約

1．K児は家庭の過保護のために甘やかされた児である。絵をかかない理由は家庭と幼稚園の雰囲気の差に基づく不安に由来したものと推定された。不安を除くための方針がたてられ，処置された中で，最っとも効果のあった方法は，保育者とK児が親しくなることであった。次に自由画を課すること，親しい友達と並ばせてかかせることで，描画面積，描画時間，色数において大なる変化が認められた。それと共に一般的な問題行動の適応も出現した。

2．A児は母親および特定の友達に依存的な児である。きまりきった絵をかく原因は，何を描くかきめるのにも依存的で，描画の手段も乏しい。物事への興味も少く，自ら創作することが少ないからと推定される。これを治療するための種々の処置の中で効果のあった方法は，A児と親しくなること，糊絵をさせる場合が最も効果があった。特に糊絵をさせることによって，水彩画の内容の変容，描画面積，描画時間が著しく増大して，非常に効果があった。それと共に一般的問題行動においても，やや変化が認められた。

〔註〕 この事例研究において，幼稚園での行動観察，処置は八尾市竜華幼稚園の山田先生の協力によって行われた。終始，心理学者に劣らない科学的な態度で資料蒐集にあたられた。

参考文献

① 広田実 1959 児童画の特徴とその評定の試み　心理学研究．29．363。

② Lowenfeld, V. 1939 The nature of creative activity. Trans. by O. A. Oeser.,London.